野上丹治・洋子・房雄 作品集

つづり方兄妹

つづり方兄妹

野上丹治・洋子・房雄＝作品集

創業25周年記念出版・愛蔵本

さしえ・カット＝今井弓子

理論社刊

理論社の愛蔵版
わたしのほん

1958年初版
NDC 915
8395-11020-8924

つづり方兄妹

作　者　野上丹治・洋子・房雄©
画　家　今井弓子
発行者　小宮山量平
発行所　株式会社　理論社
東京都新宿区若松町一〇四
電話(二〇三)五七九一〈代表〉
振替東京九五七三六
発行日　一九七四年五月　第七刷

はじめに

愛蔵版刊行のことば

この『つづり方兄妹』が一冊の本となって初めて世に出たのは、一九五八年の春のことですから、あれからもう、十五年にもなろうとしています。本そのものも、ずいぶんひろく読まれましたし、映画やテレビなどでも評判となりましたので、今では、『山びこ学校』や『山芋』などと並ぶ綴方史上の代表的名作として知られています。とりわけ、大都会周辺の庶民の生活のすみずみまでを、こどもの目でいきいきと描いた生活記録としては、あの豊田正子さんの『綴方教室』以来の記念碑として、高く評価されてもいるのです。

このように定評ある本を、改めて《理論社の愛蔵版》として、少年少女読者に親しみやすい本にする機会をもつことは、ずっと以前からの念願でありました。ちょうど、この本が出発点となって始まった理論社の《こどもの本》づくりも、もはや二五〇点を超えましたし、今年は、創業満25年の記念の年でもあります。これらの記念の思いをこめて、まず一冊をえらぶとすれば、なんといっても、この『つづり方兄妹』をあげたくなるのです。

ところが、そんな愛着をこめ、あれこれの思い出をたどりながら再編集しているうちに、いつしか、こうした身辺の事情は消え去り、もっと深い意味で、この名作の意義を考えないではいられなくなってくるのでした。

言うまでもなく、これらの作品は、日本の一九五〇年代の生活を背景として生まれてい

るのです。たんに、野上さん一家だけではなく、そのころ大部分の日本人の生活が、このように貧しかったといえましょう。戦争の傷あとは、父母たちの心にも、遊び場となる町かどや原っぱにも、まだ、なまなましく残っていました。けれど、注意ぶかく読むと、何よりもたいせつな一つのことが、いきいきと見えてくるはずです。

それは、くったくのない、のびやかな、遊びの心で、楽しく作文が書かれているということです。兄ちゃんが書くから、わたしも書く。姉ちゃんが書くんなら、ぼくも書こう。……丹治さん、洋子ちゃん、房雄くん、そしてその後に成長したクマちゃん以下の弟妹たちも、みんな、まるで楽しいおもちゃ遊びのようにえんぴつを走らせたのでした。

もちろん、こうした遊びと創造との結びつきをもたらした土台には、この一家の兄妹たちが学んだ学校があります。その香里小学校には、松原春海先生がおりました。先生はその教室の中に、書くことのよろこびを、なごやかな空気のようにただよわせることのできる先生でした。いや、この学校、この先生にかぎらず、そのころ、日本のたくさんの学校のたくさんの教室には、遊びと創造とがみちあふれていたといえましょう。そして、新聞社などが主催する《つづり方コンクール》などにしても、いわば、全国のこのような教室の空気が盛りあがって集中してくる広場であり、この広場には、すぐれた先生たちが、手をひろげて待ちかまえておりました。

私自身も後に、『きりん』という児童詩の雑誌を発行するようになって経験したことですが、じっさいそのころは、全国のたくさんの教室から、山のようにたくさんのガリ版刷

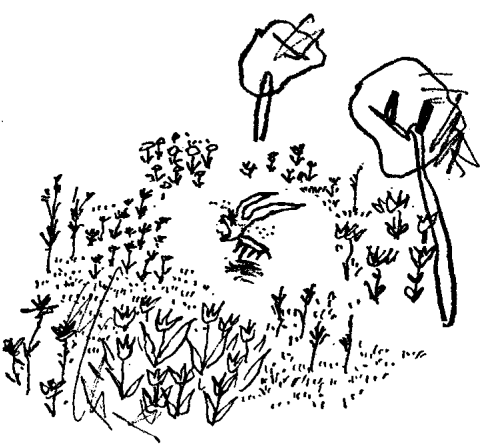
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

りの文集を送っていただいたものです。そのどの一冊にも、いきいきとしたこどもの発言があり、それをのびのびと伸ばそうとする先生の愛情があふれておりました。どの一冊からも、こどもと教師が、「ともだち」として結びあっている楽しさが、じつに、うらやましいほどにひびいてきたものです。こどもたちの創意がいちばん尊重されているありさまがうかがえて、戦後の教育のすばらしさに対する信頼が深まったものです。

ところが近年になって、そういう文集は、がくんと減りました。先生たちは、とてもいそがしくなり、校庭には自動車が並ぶようになりました。こどもたちは、黄色いシャッポや腕章をつけて、おおいそぎで帰宅するようになり、家にこもってカラーテレビにかじりつくようになったようです。学校文集は、卒業記念のアルバムみたいに、りっぱな活版刷りで各家庭にくばられ、おぎょうぎのいい文章が並ぶようになりつつあります。

さて、こうした時代の中で、この『つづり方兄妹』は、もういちど、新しい意義をもって、かえりみられる本となりました。たしかに、あのころは日本じゅうが貧しかったのです。けれど、たとえば、房雄くんが、

たこもないけど　たこはいらん
こまもないけど　こまはいらん
ようかんもないけど　ようかんはいらん

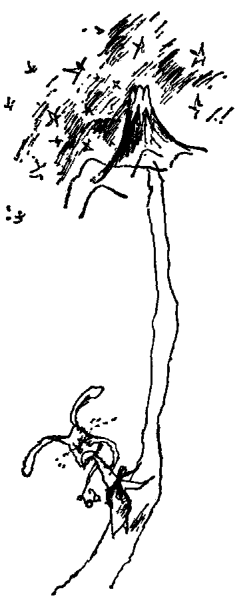


と書いている詩の強さと豊かさの底に、どんなに熱く「書くよろこび」が息づいていることでしょう。こういう強い自主的な魂のよろこびが、教室や家庭の中心にあり、こどもたちの自由な創意が、人間的な成長の根本として支持されていました。この原点の強さ明るさ確かさを思うとき、一見したところ豊かで泰平な近ごろの教室や家庭が、インスタント食品みたいに、物たりなく感じられるのです。まさに『つづり方兄妹』は、たんに過去の名作なのではなく、今こそ新しい意義をもってよみがえる、ふるさとのような温かい本ではないでしょうか。もういちど、ここから出発していただきたいと思うのです。

*

初版以来の旧版には、松原春海先生によるこの兄妹たちの楽しい紹介があり、藤田圭雄先生による長文の解説『野上兄妹と松原先生』が収められておりました。この愛蔵本では、もうすっかり有名になっている野上さんたちのことからはひとまず離れて、これらの作品そのものの語りかけに、直接ぶつかっていただきたいと思い、上記の願いだけを記して、解説に代えました。作品も、丹治さんの「一九五八年の希望」という一篇をのぞいたほか、すべてもとのままに収めてあります。カットやさしえは、必ずしも説明的にではなく、こどもの心象を漫画ふうに今井弓子さんに描いていただいたものを、余白にちりばめる程度にとどめました。

（小宮山量平）



もくじ

はじめに……1

房雄の遺した作品（小学一年から二年まで）＝9

一年生のとき……10

詩・にゅうがくしきの日＝10
おねえちゃんのて＝11
詩・おしょうがつ＝12
きょうのあさのこと＝14
ちゃいろのオーバー＝16

二年生のとき……18

ぼくらの学校＝18
童話・子うさぎの白ちゃん＝20
ぼくのうちのまえ＝22
詩・お母さん＝24
詩・くも＝25
詩・お正月のとばないたこ＝26
詩・お正月＝27
うちのひとたち＝29
おばあちゃんのおうち＝31
山へ行ったこと＝33
おかあさんのびょうき＝35

最後の日記（一月一日から四月十日まで）……37

洋子の作品（小学一年から五年まで）＝67

一年生のとき……68
詩・あたらしいえにっき＝68
わたくしのがっこう＝72
ふうちゃんとおばあちゃん＝69
けんそく会＝77

二年生のとき……78
ひなまつりのころ＝78
おばちゃんのこと＝79
まっているうんどうかい＝78

三年生のとき……84
私のおかあさん＝84
詩・マル＝98
みいちゃん＝86
時計＝100
詩・きゃらめるこうば＝90
おもちつき＝101
くまちゃん＝92
はれぎ＝102

四年生のとき……104
詩・夕ぐれ＝104
かいこんきょうそう＝108
詩・水色のきり＝104
俳句＝110
前の先生＝105

五年生のとき……111

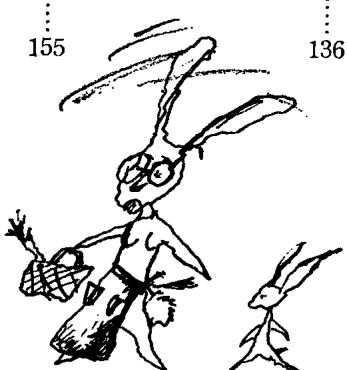
日曜＝111
雨の中を＝114
房雄ちゃんの死＝116
詩・朝ぎり＝118
四つ目の黒＝119
詩・子うさぎ＝123
色紙のりぼん＝124

丹治の作品（小学三年から中学三年まで）＝125

小学三、四年のころ……126
しんるいの姉さん＝126
私のお母さん＝128
冬の朝＝130
かやく132
おかあさんのくろう＝134

小学五、六年のころ……136
私のおかあさん＝136
ぼくは土方になりたい＝137
地球としばらくのおわかれ＝138
ズックグツの借金＝140
「母の日」に＝142
学園一日絵日記＝145
夏休みの日記より＝146
台湾さいごの日＝149
給食について＝152

中学一年生のとき……155
黒いしずく＝155
史蹟をたずねて＝160



寒い日＝162
竹囲の舟歌＝163
向井君＝165
みつくちの妹＝167
中学二年生のとき……191
『山芋』を読んで＝191
あり＝205
母＝194
大風の日の思い出＝208
詩・母の手＝196
胡蝶蘭の思い出＝212
詩・さんま＝197
迎春＝215
短歌＝199
詩・とめ公＝216
台湾の花＝199
詩・びっこの机＝218
中学三年生のとき……221
子供の人権について＝221
アルバイト227
詩・山の墓地＝224
レペシンスカヤさんに会って＝232
詩・アルバイト＝225
詩・元旦の朝＝234
詩・屋根はり＝226
詩・老婆235

そうていは，いずれも房雄君の遺作ⓐ“ぼくとくまだくん”ⓑ“おかあさんの買物”ⓒ“ともだち”より。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

房雄（ふさお）の遺した作品*小学一年から二年まで

一年生のとき

昭和三十年四月
〜三十一年三月

にゅうがくしきの日

にゅうがくしきの日
めがねをかけた
おんなのせんせいと
こわいかおの
おとこのせんせいとが
ぼくのわるくちいっていた。

小さいこえだったが
ぼくには、よくきこえた。
「このこも、また、わるい
　ことするねんやろな
　にいちゃんや、ねえちゃん

みたいに」　て。

わるいことだれするんや
ぼくがっこうへ
きたかったんやのに

おねえちゃんのて

ぼくが、まだ　ちいさかったとき、おねえちゃんも　まだ　がっこうへ　いっていなかったとき、二人で　おるすばんをしていました。

ひくれころ

「おかあちゃん　まだかな」

とおもって、おまどの上へ　のぼっていました。そしたら　おねえちゃんも　のぼってきました。せまいのに　むりに　おしてきましたので、ぼくは　おこって、つきました。

おねえちゃんは、まどの下へおちて　えらいこえでなきました。いつまでもないていました。ながいことして、くらくなって　おかあちゃんが、かえってきて　おかあちゃんもなきました。なきもって(泣きながら)、うちじゅうの、きものを　みんなもって、ひちやさん(質屋さん)へはしってゆきました。

そして、おかねを　もらって、ひらかたのほねつぎやさんへゆきました。まい日まい日おかあちゃんは、おしごとにいかないでかよいました。

さむいときから、あついときがきて、もうかよわなくてもよいようになりました。でも、おれた方の手が　えらいみじかくなって、ゆみ　みたいにまがりました。じも　ひだりの手でかきます。とてもへたで、いつでも　せんせいから　おこられてばかりいます。

それに、おねえちゃんは、せんせいが、えらいすきです。ときどき、「うち　せんせになりたいねんけど、なれるやろかな」　と言います。ぼくは　そんなとき「なれる。なれる」と言ってやりますが、こんなとき　ひとり　なけてきてこまります。

ぼくは　だれかと　けんかをして　どんなに　たたかれても　めったに　なきません。

でも、おねえちゃんが

「おまい　うちの手　おってんやろ」

と言うと、きっと、えらいこえで　なきます。

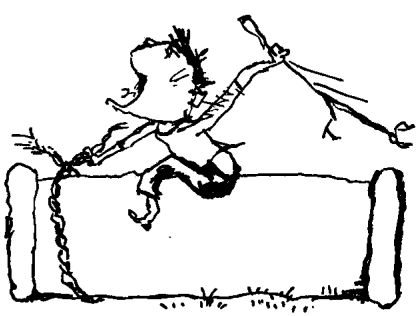
ぼくは　おねえちゃんの手が　なおるか、おねえちゃんが　せんせいに　なれるか　してくれたら　ほんまに　うれしいのになあ　とおもいます。

おしょうがつ

おしょうがつは
おとうさんのようにえらそうに
どしんどしんとやってきます
おもちをついて、

かどまつをかざって
きれいな着物をきて
おむかえしても、
おとうさんのようにえらそうに
なんにもいわないで
かえってきてすわっています。

「またらいねんね
　ほんとにね　はやくね
　きてね　きてね」
ぼくがそう言っても
おとうさんのように　えらそうに
なんにも言わないでさようならします
でも　ぼくは
おしょうがつとお父さんとが
せかいじゅうで
一ばんすきです。



（毎日小学生新聞　正月作品コンクール一等）

きょうのあさのこと

ぼくは　きょうのあさ　にいちゃんに　うでどけいを　もらいました。それで、みぎのてにつけて　みたり　みなかったりしながら　あるいてゆくと、びょういんのまえで、おおやさんのにいちゃんが　きました。そして

「ふうちゃん、いま　なんじけ」

と　いって　きき　ました。

「八じや」　と　いうと　「うわあっ」というて　えきの　ほうへはしってゆきました。

もう　ちょっと　ゆくと、つじかわさんのねえちゃんが　きました。そしてまた　ぼくに

「ふうちゃん　なんじ」　と　いって　ききました。

「九じや」　と　いうと

「えっ　えらいこっちゃ」

と　いって　はしりだしました。そして　こけました。でも　すぐ　おきて　また　はしってゆきました。

いけのはたまでゆくと、ほりの　ばあちゃんが　おおきな　ふくろを　かついで　きました。うでどけいを　みていると

「ぼんぼん　なんじや」　と　いって　ききました。

「七じや」　と　いうと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com